

第5回青森県生涯学習審議会会議録

日時	平成30年3月27日(火) 13:30～15:30
場所	青森県警察本部 6階 教育委員会室
出席者	<p>《 委員 》 敬称略 7名 (欠席8名)</p> <p>奈良 陽子 岡 詩子 白戸 美也子 柏谷 至 松本 大 春藤 千秋 工藤 清子 (天内 不二子 上澤 司 奥島 涼子 長岡 俊成 菊地 倫子 出崎 真里 住吉 治彦 増田 由美子)</p> <p>《 事務局 》 7名</p> <p>和嶋 延寿 (教育次長) 渡部 靖之 (生涯学習課長) 渡部 泰雄 (学校地域連携推進監) 佐々木 昌生 (企画振興グループマネージャー) 他3名</p>
内容	<p>1 開 会</p> <p>2 教育長挨拶</p> <p>3 案 件</p> <p>(1) 先進事例実地調査報告について</p> <p>(2) 「郷土を愛する心に関する県民の意識調査報告書」の考察より</p> <p>(3) 報告書骨子案について</p> <p>4 その他</p> <p>5 閉 会</p>
配付資料	<p>次第</p> <p>青森県生涯学習審議会委員名簿</p> <p>座席図</p> <p>資料 1-1 愛知県新城市「若者議会」の取組</p> <p>資料 1-1-2 先進事例実地調査レポート 柏谷会長</p> <p>資料 1-2 宮城県気仙沼市他各団体の取組</p> <p>資料 1-2-2 先進事例実地調査レポート 白戸委員</p> <p>資料 1-2-3 先進事例実地調査レポート 松本委員</p> <p>資料 1-3 東京都渋谷区「シブヤ大学」の取組</p> <p>資料 1-3-2 先進事例実地調査レポート 岡 委員</p> <p>資料 2-1 青森県における「郷土を愛する心」と社会教育の関係性</p> <p>資料 2-2 青森県民の自己有用感とその形成要因に関する考察</p> <p>資料 3-1 報告書骨子案 (概要)</p> <p>資料 3-2 報告書骨子案 (詳細版)</p> <p>資料 4 今後のスケジュールについて</p>

(◆会長 ◇委員 ○事務局)

案件（１）先進事例実地調査報告について

◆会長

それでは、案件の（１）にある先進事例実地調査報告について、参加した委員から報告をお願いしたい。

《愛知県新城市の実地調査報告》

愛知県新城市は静岡県との境目あたりにある人口４万６千人ほどの非常に小さな市である。ここでは、若者基本条例を制定し、毎年１千万円の予算をつけて市を活性化させるための事業を若者に提案させ、市がその事業を実施するという、非常に体系的な形での街づくりをしている。

実際に、情報センターを中高校生が集まれるようなカフェ風のスペースにリノベーションする、健康増進のスポーツイベントを自分たちで企画する、若者が中学生や小学生に政治の大切さを教えるシチズンシップ教育をするなどの提案が予算化されて翌年に実行されている。さらに、こうした活動を経験した若者達が独自に街づくり活動を始めたり、中には市議会議員に立候補して当選したりと、サイクルとして非常に上手く回っている。

課題は社会人の参加が年々減ってきていることで、その辺りはもう少し企業と連携を深めていかなければならないと言っていた。若者が立案した事業の主旨をうまく生きる形で翌年実行できるのか、つなぎ役の市職員の苦労があることも実感した。

青森でも市町村レベルでこのような取組ができると思うし、効果が大変大きいだろうと感じた。今は、若者議会のやり方を取り入れている自治体が全国でもいくつかできてきているらしいので、新城市の若者議会経験者たちが普及啓発のための団体をつくって活動している。そのような団体と連携をとりながら青森でも行われたらいいなと思いながら帰ってきた。

続いて、宮城県気仙沼市の報告をお願いします。

《宮城県気仙沼市ほか》

◇委員

まず、一日目はNPO法人「底上げ」を訪問した。理事は、震災後に地元の若者が、気仙沼のことをよく知らない、自分のことを素直に話せる場がない、アイデアを形にする仲間や場所がないことなどを感じ2012年2月、一緒に考えることが出来るとの思いで「底上げ」を立ち上げた。

「できる感覚を、うごく楽しみを、生きる喜びをすべての若者に」を掲げ、高校生たちが町のことを考え行動することが出来るよう、自主性と主体性を尊重し伴走者として支えている。「底上げDrinks」とは、月に一度、高校生と大人が共に食事をし、大人から話を聞く取組である。「フリースペース」とは、放課後に高校生が自由に集まることの出来るコミュニティスペースである。「SOKOAGE CAMP」は大学生向けのプログラムで、1週間合宿し、新しい価値観にふれ視野を広げてもらう取組である。以上の活動に関わった高校生の中には卒業後もOBOGとして活躍している人もいる。

理事は、常に独りよがりにならないよう意識し、いろいろなコミュニティ・自治会、事業主などに活動を理解いただき情報を共有するよう心掛けている。小・中学生の頃か

ら関わった子が変わっていく姿を間近で見られ、地域を好きになってもらい、また、地域の大人の反応が変わり同じ目的を持った人の輪が広がることは大変嬉しいと感じている。課題としては、活動の周知、資金面、高校や県の理解、専門的な情報など、活動するほど年々増えてくるとのことであった。

団体名は、新しい物を継続していく力、意識もあと1歩あげたいとの思いで〈底上げ〉と名付けたとのことであった。

2日目は、一般社団法人「Ishinomaki2.0」のスタッフから話を伺った。彼は、サラリーマンとして4年間務めた後、2013年にIshinomaki2.0の事務局員として北海道北見市から石巻市に移住している。

Ishinomaki2.0は「世界で一番面白い街を作ろう」を合言葉に様々な活動をしている。2013年から次世代の担い手の育成をテーマに「いしのまき学校」プロジェクトをスタートさせた。「いしのまき学校」は、街中をキャンパスに、街の大人を先生に、石巻を教材にして地域の課題を探し解決するための活動や、キャリア教育、多世代交流などにより、キャリア発達を促し人生観を深めるプログラムである。2016年からは、いしのまき学校の既存プログラムを続けながらも市内の高校や他の地域協力団体と連携・協働したプログラムなどを行い、更には業種やセクターを超えたネットワーク作りにも力を入れている。

「KAERU CAMP」は、高校生の起業家精神育成のためのプログラムで、2泊3日のキャンプを通して、地元企業や行政、住民が抱える課題を解決するプランを考え、キャンプ終了後も企業や行政とともにプランのアクションを行うというものである。

「ミライブラリー」は、県から高校生のキャリア教育推進業務を委託され、高校生と社会人の先輩との対話を通して社会人になるための心の準備の時間を持つ取組である。

課題は学校との連携で、学校の課題解決が思うようにいかないことや、民間も学校も公的機関も既存の枠を超えることだそうである。プログラムへの参加者数、継続性・活動費、特に人件費、場所代、講師謝礼などが課題となっている。

そして、教育に対する意識の違いが課題となっており、社会人同士のつながりが重要だとのことであった。高校生が町のことを好きになり、郷土に愛着を持ってから進学や就職をさせることが、これからの石巻の課題だと言っていた。

団体名については、災害前を1.0だとすると、災害後は0.6になったのか0.8になったのかは、それぞれだが、1.0に戻るのではなく2.0にバージョンアップしたいという思いから「Ishinomaki2.0」と名付けたそうである。

次に訪れたのがNPO法人「かぎかっこ PROJECT」である。理事長は、店舗の内装デザインの仕事に4年間携わり、ハード面ばかりが重視される仕事に対し、自分の思いとのギャップに長い間悩んでいた。32歳の時、CO. TO. HANAのスタッフ募集を目にし、兵庫県から石巻に移住して来た。

『「」かぎかっこ PROJECT』は、高校生世代に対し、地域とのつながりを持つ機会や、生きがい・働きがいを考える機会、そして、生きる上で対面する様々な課題を自分自身で取り組むための力が必要だと考え、ゼロから主体的に学ぶ取組である。理事長は、将来まちを担う人材となって社会へ巣立つための取り組みを地域の人々や高校生自身と一緒に生み出し、継続の仕組みを地元に残したいとの思いで活動している。

いしのまきカフェ「」は、2012年6月、様々な学校から40名の高校生が集まり、商品開発・空間デザイン・情報発信の3チームで、それぞれの専門家からアドバイスを受けながら11月3日オープンした。店名は何でも入る可能性や個性、原点のワクワクを大切にしたいという思いから、「」のままになったそうである。カフェは、調理・接客・会計の他にも、様々な社会的体験を得られる場であり、雑貨等の商品制作・

販売や、空間・家具等のデザイン、Webやチラシでの情報発信など将来役立つ様々な学びが得られる。そして、地産地消に基づいたメニューを、地元の生産者、加工会社、専門家などのサポートを受けながら地元産の物を生み出していくことは、高校生自身の力を身につけていくと同時に復興支援活動にもつながっている。

「仕事みち図鑑」という取組は、石巻の高校生を集め、理想の授業を考える作戦会議を開き、「どんな仕事があるのか、生の声を聞き、体感したい」「好奇心や創造力を磨きたい」「いろいろな人の考え方に触れ合いたい」などの高校生の声から生まれたプロジェクトである。仕事にまつわる話を聞き出し、その人の職場を訪ね、現場も体験し、出会った人々の写真と言葉を<図鑑>としてまとめ、最後には展示発表会を開催するというものである。専門家や有識者がカリキュラム内容を監修し、授業や教育団体など、開校したい人と高校生が集まれば、どこでも実地可能な仕組みやツールが揃っている。

「高校生百貨店」は、石巻・東松島・女川の高校生が地元の商品を発掘し、生産者の想いや背景と共に仙台・大阪・東京に出向き石巻圏域の魅力を発信しながら販売するという取組である。

「KAERU CAMP」は、高校生の起業家精神育成のためのプログラムで、2泊3日のキャンプを通して、地元企業や行政、住民が抱える課題を解決するプランを考え、チーム対抗で提案発表し、キャンプ終了後も企業や行政とともにプランのアクションを行うものである。

『かぎかっこ PROJECT』では、高校生世代の団体・生産者や企業・行政・石巻以外の教育機関・NPOなど、地元はもちろん他地域ともつながり、連携の輪を拡げている。運営するスタッフは活動していくうちに、個々の成長を見ることができ、人により伸びしろの違いが大きいことを実感し、次年度の課題が分かるようになってきたということである。

団体名は、主役は高校生であり、彼らが描くキャンパスはまだ真っ白のままである。大人が用意するのは、キャンパスの枠である「 」と少し背中を押すことだけ、その想いを記号の「 」に込めて『かぎかっこ PROJECT』と名付けた。

最後に「ふうちゃん」を紹介したい。ふうちゃんは、高校生の時に『かぎかっこ PROJECT』の活動に参加し、大学中退後、石巻市に戻り、Ishinomaki2.0のスタッフとして活動しながらも<かぎかっこ>にも足を運んでいる。目標は、もう一度会いたいと思われる人になることだそうである。これまで、コンセプト会議をすることによって、アイデアを出す⇒話し合う⇒結果⇒まとめるなど学校では習わないことを学べたということである。それらの体験により、行動力に自信が付き周りを見られるようになったと話していた。一番良かったことは相談できる大人が増えたことだそうである。ふうちゃんは<住んでいる町から生活している町へ>を目指し毎日を過ごしている。

<底上げ>と<Ishinomaki2.0>は、活発な高校生が多く参加しており、<かぎかっこ>はどちらかと言うと人前に出るのが苦手な高校生が多いようである。様々な性格の生徒を受け入れる場所があることは地域の高校生にとって非常に喜ばしいことだと感じた。また、それぞれが、色々な活動に参加する機会がありネットワークを広げている。とにかく、多くの高校生が参加出来るよう、積極的にかつ多面にわたり周知する必要性を強く感じているとのことであった。

◇委員

まず、認定NPO法人底上げでは、理事が一人で切り盛りしている印象を受けた。ほぼ高校生が関わるすべてのイベントに顔を出しているようで、高校生の語りを引き出して、主体性を尊重している。彼は、高校生に関わる時、「聞くこと」と「待つこと」を重

視しているということであった。高校生はいろいろな想いは持っているのだが、その想いを素直に話せる場がないので、自ら話してくれることを待つことが、高校生を支援するときのポイントだと言っていた。高校生だけで様々な事業を創るのではなく、大人と高校生との交流の中で、互いに自分のことを語り合うことで、高校生の主体性だとか、積極性が生まれてきていると感じた。さらに、話の中で、「郷土愛だけでは不十分である。地域社会に新しい価値をつくることが大事だ。」と話してくれた。

続いて、「いしのまき学校」の取組である。まず、市内の高校生は「2:6:2」に分類できると話していて、現在「いしのまき学校」に参加し活発に活動している高校生は「やる気のある」高校生であり、それは高校生全体の2割に過ぎないと話していたのが印象に残っている。最近、「いしのまき学校」では、学校との連携を重視している。NPOが学校と連携するときのポイントは、学校側が抱えている課題をNPOが解決していくというスタンスで学校側と連携することだと話していた。学校側の課題とは、卒業した者の早期離職であるため、高校生のキャリア教育を引き受けている。

具体的な事業内容の中でユニークだと思った取組は、「ミライブラリ」という社会人と高校生の語り場である。青森県でも大学生と高校生の語り場というのは、県の教育委員会の事業として行われているのだが、社会人と高校生の語り場だと地元で大学生がいなくてもできる取組となっている点がよいと思った。いろいろな地域で応用が可能なのではないかと思い、すごく興味をもった。

若いスタッフの“ふうちゃん”と話をすることができた。彼女が高校生のときに、「かぎかっこ PROJECT」の活動を通して、それまでは家と学校の往復だけで、石巻という街はただの住んでいる街という感覚だったのが、「住んでいる街」から「生活している街」へ意識が変わったと話してくれた。社会教育を通して高校生に感じてほしい大事な視点だと感じた。地域により深く入り込むことによって、住んでいるではなく、生活しているという暮らしに根付いた感覚というものが広がってきていることがすばらしいと感じた。さらに、「現在もう一度会いたいと思われたい人になりたい。」と思って活動していることである。彼女が高校時代に体験してよかったと思ったから、それを同じ高校生に経験させてあげたいと、現在「いしのまき学校」や「かぎかっこ PROJECT」で高校生を支援しているということであった。

「かぎかっこ PROJECT」のポイントは底上げと同様に、若者の主体性を大事にしているところである。もう一つは、大人との交流をつくっていくところである。その中でもかぎかっこ PROJECTの取組の中で重要だと感じたことは、より多様な大人との交流をつくっているところである。カフェをゼロから高校生が造り上げたところにも現れているように高校生を大人と対等な主体として位置づけているということも印象的であった。そして、高校生がチームで地域づくりの課題に取り組んでいる。つまり、単に地域をよくするというだけでなく、仲間づくりの場でもあるということが印象に残った。

まとめとしては、現地に行って初めて分かったのだが、実は今回訪問した団体同士が知り合いで、団体同士のネットワークがあるということである。主役が高校生で自分たちは伴走する存在なのだというので、“伴走者コミュニティ”と名付けた団体間のネットワークをつくっていたというのが印象的であった。お互いに得意分野や不得意分野があるので、そういう団体がお互い交流することで、多様な交流の場が生まれる。更にIshinomaki2.0の齊藤氏は地域の中で浮いた存在と感じていても、みんながつながることによって、地域の見え目が変わってくると話してくれた。総じて、若者支援においては、自分づくりと仲間づくりがポイントなのではないかと感じた。

◆会長

それでは、シブヤ大学の報告をお願いします。

◇委員

シブヤ大学は青森と全然違う地域特性があるので、そこが面白いと考え実地調査をさせてもらった。結論から言うと、青森だけでなく、どこの地域でも応用できる取組であったと思う。渋谷の街をキャンパスと捉え、全員が生徒であり、全員が講師であるという形でいろいろな事業を毎月第3土曜日にいろいろなところで開催している。そこに参加した人たちが参加したいという思いを無駄にしないで、その人のやる気や、その人の熱量によって参加できる仕組みができています。私は、それを「受け皿を仕組み化している」と表現したのだが、シブヤ大学では参加した人たちが、ボランティアスタッフというポジションで登録することができる。その後、活動を何回か体験した後に、授業コーディネーターとして、授業を企画することができる。運営スタッフは代表を含めて3名いるのだが、そこをやりたいたいと思えばそのポジションでも参加できるというようになっている。

代表の方は、「ビジネスの手法で授業のクオリティを担保する」ことを意識しているとのことであった。ただやりたいとか、楽しいとか、誰かのためでは維持していくことはできないので、お金の面とか継続性を考えていかなければならないとのことであった。シブヤ大学では、一緒に企画すると企業の利益につながるというメリットを提案して授業を開催している。企業とのビジネスをすることで、普通の授業は無料にすることを大事にしている。授業コーディネーターは有償ボランティアという形になっていて、一授業企画すると4万円がシブヤ大学から支給される。

シブヤ大学が大事にしていることは、企業や行政とのコラボである。互いがウィンウィンの関係となるようにコラボ連携している。企業からの寄付という形ではなくて、支え合って仕事として授業を企画するという仕組みを作っている。

次に、PDCA サイクルの徹底である。授業後の振り返りを重要視している。シブヤ大学事務局にコーディネーターとボランティアスタッフが集まり、全員でその日に行われた授業を共有する仕組みになっている。実地調査に行った日は年末ということもあり、連携姉妹校の福岡、大阪、神奈川からの参加もあった。誰でも来ていいよという雰囲気があり、とにかく楽しい雰囲気が感じられた。

青森で実現できるかだが、やはり「楽しい」とか「居心地がいい」と感じられることと、誰がやっているのかが見えるようになっているので、やってみたい熱量が高い人は、参加する十分な理由になるのでないかと感じた。このような根幹は青森でも変わらないと思うので、青森でも実現できると感じた。参加したいと思っている人がその熱量によって選択できる仕組みを整えることが必要だと感じた。また、授業のアンケートと一緒に封筒が配布されるのだが、応援したいという気持ちがあれば、自分の裁量でお金を入れてくださいとお願いしている。これもいい仕組みだと感じた。これは、ただ封筒を用意するだけなので、青森のどの団体でも使えるのではないかと思う。

◆会長

先に案件(2)を終わらせたい。生涯学習課が行った県民の意識調査の分析は、審議会ともかなり内容的に重なる部分が多くあるので、考察を短く紹介してもらいたい。

案件（２）「郷土を愛する心に関する県民の意識調査報告書」の考察より

◇委員

郷土を愛する心がどういうものに影響を受けているのか分析した。郷土を愛する心を形成するものは、自己肯定感と家族との愛情や絆、そして、友人や相談資源である。この３つが郷土を愛する心と相関関係があることが分かった。基本的な生活習慣や、家の中で手伝いするとか、家族と一緒に季節の行事を体験したとか、家族で地域の祭りに参加したとか、町内会のゴミ拾いに参加したとか、近所の人との交流があったとか、というところが家族との愛情・絆に関係していることが分かった。また、友人・相談資源では、同じようなところなのだが、これに合わせると、友だちと遊んだ経験とか、部活や習い事の経験も含めて関係していることが分かった。自己肯定感も、同じく、家庭の社会的・教育的条件とか、友だちと遊んだ経験や部活や習い事の経験、近所の人との交流に関係があるということが分かった。

そこで、社会教育行政がアプローチをしていく視点として、基本的な生活習慣やお手伝い、家族行事などになるのではないかと思う。また、三つ挙げさせてもらったのだが、まず、家庭教育支援はやはり大事だということである。次に、学校・家庭・地域で様々な経験をつくることである。家族や友だちとの関係がいいということが、郷土を愛する心につながっていると実地調査からも見えているので、そうすると小さくて身近な仲間づくりというのが、郷土を愛する心に影響を与えるのではないかと思う。

◆会長

私は、前回の調査から引き続き、自己有用感という切り口から県民の意識を分析した。昨年度が 19 歳から 35 歳、いわゆる若者層を対象としたのに対して、今年度は 20 歳から 60 歳と幅広い年齢層を対象としている。最近の若者は自己有用感が低いと言われているがそれは本当なのか確かめたいと考えた。

結論から言うと、確かに歳の若い人ほど自己有用感が低くなる傾向がある。ただし、少し複雑なのは、若い人の中でも他人に受け入れられたり、ほめられたりした経験がある人は、必ずしも自己有用感が低くはなっていないことだ。実は、他人にほめられる経験は、若い人の方がより頻繁に経験している。つまり、年齢は二つのルートを辿って、自己有用感に影響を及ぼしているのではないか。

最近の若者の自己有用感が低くなっているのは、おそらく動かしようのない事実なのだと思う。その一方で、周りの人にほめられた経験や、家族の中で親密な関係を持てた人は、たとえ年齢が若くても、それなりに自己有用感が高い。家族と地域社会が連携して、若者たちの自己有用感を高める取組が有効であることを結論として述べたつもりである。

◆会長

それでは、実地調査の報告と生涯学習課が行った調査の結果も今回の審議会の報告書には入ると思うが、意見を伺っていきたい。

◇委員

委員に聞きたいのだが、三つの団体がつながっていたという報告があったが、三つの団体がまとまって行えばすごいことができそうな印象を受けるのだが、実際、何か行われているのだろうか。

◇委員

それぞれの団体が子どもや若者に関わる活動をしている団体なので、昨年度と今年度は、教育に関するシンポジウムを開催したようだ。それから、定期的に集まってお互いに情報交換しているということを書いていたと記憶している。

◇委員

報告を聞いていて、それぞれの団体が楽しく活動していることが伝わってきた。やる方が楽しく感じないという活動は長続きしないと思う。

◇委員

県民の意識調査の報告を聞いて、やはり最後は家庭教育が大事なのだと思った。自己有用感や自己肯定感が最後は家庭教育に支えられているという結果となったので、感動した。

◆会長

現在は余裕がなくなってきた家庭も多くなっているので、家庭だけではどうしようもないところはやはり、学校や地域で支えていかなければならないと思う。

◇委員

県民の意識調査の考察に関して疑問に感じたことなのだが、自己有用感が高い人は、自己肯定感も高いという結果になっているのだろうか。

◆会長

自己肯定感には自己有用感を含む、より大きい概念になる。特に他人との関わりに注目して、自己肯定感の高さ、低さを計るときに使われるのが自己有用感である。家族の中で自分が役に立っているとか、受け入れられているとか、あるいは、地域でどうかというのを計るので、自己肯定感という概念の中の一部を調査で計ったという考え方になる。

◇委員

自己有用感とは他人があつての自分の思いという解釈でいいのか。

◆会長

そのとおりである。自己肯定感というのは多様な要素を含んでいるので、自己有用感に絞って測った方が有用ではないかと考えている。例えば、何の根拠もないのに自分はすごいのだと考えている人は、自己有用感はそんなに高くはない。

シブヤ大学について聞きたいことがある。愛知県新城市や宮城県気仙沼市や石巻市の取組は、メインのターゲットが高校生という部分で共通しているのだが、シブヤ大学がターゲットとしている年齢層はそれよりも上という理解でよいか。

◇委員

年齢的には、大学生や高校を卒業した若者だと思う。参加する人の中には若者だけでなく、50代くらいの人参加しているし、30代の人たちも多く参加している。

◆会長

生涯学習や社会教育の世界で考えると、一番捕まえづらい層になるが、シブヤ大学に参加する人たちは、どのようにシブヤ大学にはまっていくのだろうか。

◇委員

シブヤ大学では、いろいろな企業と連携することによって、人がたくさん集まってくるところで PR ができている。シブヤ大学が企画していたということが周知されて、若者が参加するようになったと聞いている。東急ハンズの店内で、DIYの道具を実際に使いながら造ってみようという企画をシブヤ大学が主催で開催している。すると、東急ハンズには若者も多く集まってくるので、ここで何かやっているシブヤ大学に興味を持ってくれるようになる。若者が好きな企業とかとコラボすることによって、自然と若者に認知されるように上手に宣伝している。

◆会長

若者を集めるというよりは、若者がいる場所でシブヤ大学の授業が行われているという感じなのだろうか。

◇委員

そのような感じだと思う。あと、シブヤ大学で特に気を遣っているのがデザインである。見た目がよくないと若者は来ないと言っていた。若者にとって魅力を感じるかっこいいデザインであることが大事だと思う。そこには、しっかりとお金をかけてデザインしてもらっているということであった。視覚から入って行って、参加した若者がかっこいいシブヤ大学で学んできたと思ってくれることで、他の若者も学んでみようという気持ちになってくれるのだと思う。その効果は高いと言っていた。

◇委員

実地調査報告を聞いて、共通しているポイントは、地域の中に価値を見出すことだと感じた。あとは、コーディネーターであったり、伴走者であったり、つなぎ役であったり、やはり大人が最後までつながっていないとできないことなのだと感じた。また、シブヤ大学のように、参加したいという大小の気持ちの受け皿を用意しておくことが大事だと感じた。

むつ市でも市民連携課という部署で、最近ようやく高校生を巻き込んで地域づくりに関するアイデアを生かす取組が行われるようになってきた。しかし、高校生の中には途中で脱落していく人がいる。でも、1回目に行ってみようと足を運んだその気持ちをもっと大事にしなければいけないのではないかと感じた。今日はとてもよい事例を聞くことができ感謝している。

市民連携課で街づくりを行っているときに、外国語指導助手の先生が参加していた。その先生は、どうしてむつ市の人たちは地域に小さなお店がいっぱいあるのに、そこに買い物に行かないのかと言っていた。また、むつ市にいる間は小さなお店を一軒一軒すべて回ることを目標にしていると言っていた。それも一つの目の付け所だと感じた。私ももう一度、目を開いて考え直さなければいけないと思った。

案件（3）報告書骨子案について

◆会長

それでは、骨子について事務局から説明をお願いします。

○事務局

(資料3「報告書骨子案について」の説明)

◆会長

ここで骨子をある程度まとめておいて、次には報告書案の完成度を高めていくことになるのだと思う。生涯学習や社会教育の枠を超えたような話題、例えば企業との連携であるとか、知事部局の方でやってほしいこととかも、審議会として意見を述べておいた方がいいと思うので、そのような意見も出していただきたい。

◇委員

前回の審議会でクリエイトまち塾と A-Paradise の取組を紹介してもらったが、先進事例と大きな違いというのとはどのようなことになるのか。

◆会長

新城市の例で言うと、自治体の本気になっている点だと思う。つまり、若者のために条例を制定し、年間1千万の予算をつけ、若者議会で議決されたことを翌年に各担当課が実施すると決めているのは、青森の中では例がない。石巻市と気仙沼市の取組は、クリエイトまち塾の取組と質的に違うというより、同じ方向性をより徹底・洗練させたもののように思える。

◇委員

支援する側の方法が今回の実地調査で見えてきたように思う。基本的にクリエイトまち塾や A-Paradise の取組は実際に活動している若者の話だったと思うが、その若者をどう支援していくのか、実地調査は参考となるが多かったのではないかと思う。

◇委員

若者を主体として若者が支援しているというところは似ていると感じている。

◆会長

青森県内で先進的に活動している団体もそうだし、他県の事例を見ている、やるべきことというのは地域においてそんなに違うわけではなく、むしろ若者が中心となって一定の責任を任せた上で、それに伴走する大人の役割が重要だということが共通しているという理解でいいのではないか。

シブヤ大学と県内の事例と違うところがあるとすればどんなところだと思うか。

◇委員

シブヤ大学は会社のような経営をしているところが違う。経済をものすごく大事にしているところが、県内にはあまりないと感じた。行政との関わりでいうと、渋谷区の生涯学習課が生涯学習講座の開催をシブヤ大学に委託している。シブヤ大学がなくなると、生涯学習課が困るという関係になっていて、その辺りが県内にはない。それから、実際に実地調査したら、年齢に関係なく運営されていた。誰が来てもいいという雰囲気の中で若者が集まっているところに魅力を感じた。逆に言うと、若者向けではなくて20歳で参加した人が40歳になっても継続的に関わっていけるという未来を描けるような関わり方ができるのがシブヤ大学にある。一過性じゃないような感覚をもたらすところも県内の事例とは違うと感じた。

◇委員

新城市と石巻や気仙沼とは微妙に違うところがあって、自治体との関係は石巻や気仙沼では課題があるという話しであった。また、石巻や気仙沼の場合、県立高校と連携した事業を実施しているため、県教育委員会とのつながりはあるが、市の教育委員会とはつながりが十分ではないという話だったので、新城市やシブヤ大学とは違うと思う。

◆会長

新城市も教育委員会の話はあまり出てこなかった。首長部局の街づくり推進課というところが中心になって若者施策を行っていた。各事例でスタンスは違うようだ。

●事務局

新城市は若者議会に多くの高校生が参加している。また、気仙沼市や石巻市は高校生を動かす仕組みになっているわけだが、事務局としては高校生と若者は分けて捉えていくべきではないかと考えている。高校を卒業して20歳代から30歳代までの世代を若者と呼んでいる傾向があるのだが、高校生を含めて若者と捉えるのか確認しておきたい。高校生は次の若者世代として育てていかなければならないのか、どのように整理したらいいのか議論いただきたい。

◇委員

その概念として高校生が若者に含まれないというのはどのような理由があるのか。

●事務局

高校までは学校教育の対象となる。高校生が地域の構成員としての要素を持っていると思うので、若者に含めてしまうという考え方もできる。地域では学校と関係なく動いているので、そのような捉え方でよろしいか。

◇委員

私の中では、若者の中に高校生を含めて考えている。高校生も若者の中に入っているという意識であった。

◆会長

学校というルートを通じて働きかけができるのは、高校生の特徴でもあり、街づくり活動等への参加を学校経由や教育委員会経由で働きかけできるのは大きい。しかし、高校生は卒業によっていったん関係が切れてしまうし、高校時代に地域との関係が薄かった生徒は、卒業後どこへ行ってしまいか分からないということもある。学校時代の経験がその後の若者の生活や意識に大きな影響を与えているのは事実である。私も高校生は若者の取組を考える際にははずせないのではないかと印象を持っている。

●事務局

そうすると、生涯学習審議会としては高校に対するアプローチがあってもいいのではないかと考えている。高校側からもそのような高校生がいたら、どんどん出してほしい、理解してほしいと呼びかけることが必要なのではないかと考える。先ほどの報告の中にも高校と連携したいという話があったので、報告書の中でピックアップして見せていきたい。

◆会長

学校とは別に高校生が活躍できる第三の場所を提供できるのが社会教育や生涯学習の強みだと思う。その辺の連携が大事になってくるのではないか。また、連携ということでは企業との連携も大事だと思う。シブヤ大学のように一部は行政の枠組みの中で講座を開催するが、そうでないところは企業とのコラボで開催するというやり方がある。むしろそちらの方が、若者が多く集まる場所で行えるので有効かもしれないということが分かった。青森県内であっても若者が集まる場所に仕掛けていくことが必要で、そのための企業の連携というものが重要となってくる。この辺りも項目として報告書の中に入れてくるのではないか。

◇委員

報告書の骨子案については、特に異論はないが、キーワードとして“伴走者”を入れてほしい。タイトルとして入った方がいいのではないか。若者の活動の伴走者が重要であるし、新城市やシブヤ大学のように伴走者を支援するような仕組み、伴走者を育てるような仕組みも大事だということが確認できたと思う。

◆会長

もう一つ気になっていることがある。子どもの成長段階に応じた関わりについては報告書の中に盛り込まれていくが、社会人もひとくくりにはできず、関わり方も多様であるべきだ。そこのところを上手く理解してもらえるような書きぶりにしていきたい。報告の中にあつた2:6:2のように、リーダーとして活躍できる高校生もいれば、何か特別な支援が必要な高校生もいる。コーディネーターとして引っ張って行ける人もいれば、それをサポートする役割の大人もいるというような、多様な関わり方ができる場をつくるのが重要だと思う。その辺を報告書の中に盛り込みたい。

それでは、案件についてはこれで終了ということになるので、事務局にお返ししたい。

4 その他

(資料4「今後のスケジュールについて」を説明)

5 課長あいさつ